

# 現代日本語における接辞「めく」の意味・用法

鈴木 智 美

## 1. はじめに

本稿は、現代日本語における接辞「めく」の意味・用法を分析する<sup>(1)</sup>ことを目的とする。分析の対象とするのは、以下の(1)(2)に示すような「名詞<sup>(2)</sup>+めく」である<sup>(3)</sup>。名詞を修飾する場合には「名詞+めいた+名詞」の形になる。述語部分で用いられる場合には、「めている」「めいてくる」の形をとることが多い。(以下、分析の対象となる接辞「めく」に下線を付して示す。また本稿では、特に出典を示さない例文は執筆者による作例である。)

(1) 日差しがようやく春めいてきた。

(2) ついお説教めいたことを言ってしまう。

これまで接辞「めく」については、主に中古語などを対象として多くの研究がなされてきた。しかし、現代日本語において接辞「めく」がどのような意味を担い、どのような事態を述べる際に用いられるのか、その意味・用法を詳細に分析した研究は見られない。

## 2. 「めく」の造語力

現在、接辞「めく」が分析・記述の対象としてさほど顧みられない理由としては、これがかつてほど強い造語力を持っているとは思われない(山口(1993)など)ことがあるだろう。「めく」は、中古から中世にかけて豊かな造語力を持っていたことが先行研究によって明らかにされている。現代日本語では日常語として使いにくくなった表現も多い<sup>(4)</sup>。

しかし、一方、現代社会の動きを反映するかのように、「めく」には「企業戦略めく」「悪徳商法めく」「誹謗中傷めく」「個人攻撃めく」「成果主義めく」「中間管理職めく」など、4字以上の漢語名詞に後接する例も見られるようになっている<sup>(5)</sup>。また、以下の(3)～(5)のように、カタカナ表記の名詞に後接する用法も見られる<sup>(6)</sup>。(当該の名詞に    を付す。)

(3) デパートやショッピングモールを中心に、すっかりクリスマスめいてきた今日この頃。

([http://bb-guide.tv/index\\_backup/1205/index.html](http://bb-guide.tv/index_backup/1205/index.html))

(4) 2ヶ月目の恋愛運：せっかくカップルめいてきたとたんに、喧嘩？何とかうまく、仲良くなるための喧嘩にしておきたい所だけど、[略]。(http://allabout.co.jp/interest/fortunetelling/closeup/CU20040213A/index.htm)

(5) 辺鄙な観光地は観光客を増やそうとして、[中略] ウリであった素朴さを失い、全体が

額縁の中の作り物、生活臭のないテーマパークめいてくる。(「観察と感想 25・菊地恵善の哲学ノート」<http://www.geocities.jp/eckiku/kansou25.htm>)

上記のような表現は、我々が接辞「めく」から直感的に感じとる、一種独特の古風な趣を逆手にとった、ある種の新鮮さを感じさせる表現ともなっている。そして確かに、このような“目新しさ”こそは、かつて豊かな造語力を持っていたとされる「めく」が、現在は既にその勢いを失っているとの分析を逆に裏付けるものであるとも言えるだろう。

しかし、「めく」は、他の類義の表現によって完全に言い換えてしまうことのできない、何らかの固有の意味を担っているはずである。そして、それが現在意義を失っていないからこそ、その造語力が一面で復活を見せているのではないかと思われる<sup>(7)</sup>。

### 3. 先行研究の記述の検討

大野・浜西 (1993:458, 1143) では、「めく」の意味は「本当にそのものらしくなる意と、一見そのものらしく見える意とがある」(下線は引用者)と記述されている。しかし、この場合には、以下のような類義の表現との意味の違いを明らかにする必要がある。

(6) 日差しがようやく春 めいて／らしくなってきた。

(7) つい愚痴 めいた／っばい／のようなことを言うてしまう。

また、他にも「それが表す要素をもっている」(グループ・ジャマシイ編著 (1998: 569-570))、「その名詞が表す状態へ変化することを表す」(白川監修 (2001: 542-543))、「前項成分の持つ意味内容の徴候、兆し、又は要素が、それと分かるほどに表面に現れ出た様子、又は、加味された様子を表す」(中村 (1987: 426))等の記述がある(いずれも下線は引用者)。しかし、いずれの記述も、以下のような点から考えると十分であるとは言えない。

まず、「めく」によって表される事態には、一種の「曖昧さ」と言うべきものが観察されることを的確に記述する必要があると思われる<sup>(8)</sup>。「めく」を用いた文には、対象のどこからどのように感じるのか、あるいはなぜそのように感じるのかを、明確に特定したり説明したりできないことを表す、以下のような表現との共起が多く見られる。(当該の表現に    を付す。)

(8) 「どうでもいいことだが……」[中略] 自分自身にもそれは、何か言い訳めいているように思われた。(http://www.mikio-e.com/novel/sheep/sheep11.html)

(9) 幼い頃から孤独感を抱き続けてきた「僕」がふとしたきっかけで昔好きだった女性に再会し、恋に落ちる物語。[中略] 最終的に主人公はこの世界に踏みとどまることになるのだが、結末はどこか謎めいている。(http://www.amazon.co.jp/gp/cdp/member-reviews/A29PJPMJ11P2A3)

(10) どことなく光が冬めいてきたような気がします。(www1.plala.or.jp/shinsyurailview/)

t\_photosalon/hyosi/2004/2004hyosi.html)

(11) アンゴラには、ドラムにあわせての躍動感にあふれたダイナミックな伝統的踊りもあるが、[中略] キソンバの音楽は、なんとなく切なく哀愁めいているものが多い。

([http://ibaraki-ov.jocv.net/kikanshi/nmudamuda02/99spr\\_05.htm](http://ibaraki-ov.jocv.net/kikanshi/nmudamuda02/99spr_05.htm))

(12) 二月も末になると、もう何となく春の宵めいた暖かい夜風が頬をなでて、[略] (『茶漉』日本語用例・コロケーション抽出システム(一般公開版)(<http://tell.fl.purdue.edu/chakoshipub/>)で「青空文庫」一部抜粋を検索)

また、「めく」を用いる際の話者による事態のとらえ方についても、その特徴を記述する必要があると思われる。

(13) 予告した通り、今日は重要なポイントについて「解説／?解説めいたこと」を行う。

(14) 経験に裏打ちされた、「自信／?自信めいたもの」は当然持つべきだ。

(13)(14)のように、「解説」を行うことや「自信」を持つことの重要性や価値を話者が認識し、前もってそれを予告したり、当然持つべきとらえている時には、「めく」の使用は不自然である。一方、以下の(15)(16)のように、話者が時期的・内容的にそれが現在の自分にふさわしいものではないとらえている時、「めく」の使用はむしろ自然となる。

(15) 専門家の方々を前に、今さら私などが解説めいたことを行うのは気が引けますが。

(16) もちろんまだまだですが、新米の私にも、少しずつ自信めいたものが生まれてきた。

また、森田(1996:196)は、「めく」は「じみる」とともに「そうでないモノが極めてそれに近い状態にあることへの極端なマイナス評価の接尾辞」(下線は引用者)と述べている。確かに「めく」が後接する名詞には「謎／秘密／矛盾／因縁／批判／非難／皮肉／自嘲／脅迫」などのマイナスイメージを持つ名詞が多く見られるが、「めく」自体がマイナス評価を表すのかどうかは、「じみる」との違いを踏まえ、検証することが必要だと思われる。

#### 4. 接辞「めく」の意味

以上のような点を考慮に入れ、本稿では、「XがNめく」の意味を「対象Xに名詞Nで表される事物の中心的特徴が現れ出ることを、Xそのものの様相の変化として非分析的にとらえて表す。それは、明確に特定できるほどにその程度が進めば、完全にNと言ってよいものになると考えられる変化である。ただし、話者はこのような様相の変化が、その場面・状況において当然の成り行きとして予測されていたものではないことを認識している」と考える。

以下、4.1では「らしい」「のようだ」と比較しながら、接辞「めく」が表す様相の変化がどのようなものかを見る。4.2では「めく」に見られる「非分析的」とらえ方、4.3では中心的特徴の現れについて、それぞれ「ばい」「だつ」「づく」と比較しながら見る。4.4では、事

態に対する話者の認識および感情・評価的意味の側面について述べる。

#### 4.1 「めく」が表す様相の変化—「らしい」「のようだ」との比較

「めく」は「らしい」「のようだ」と比較すれば、「本当にそのものらしくなる」あるいは「一見そのものらしく見える」ことを表すとするのは、いずれも適切ではない。

(17) 東京では今日、4月半ばの春 {らしい / ?めいた} 日差しを浴びて…

(17) の「春らしい日差し」は、まさに春そのものと言ってよい、春の特徴が十分に備わった日差しのことを表す。一方、「日差しが春めく」は、確かに春の特徴が現れ出る<sup>(9)</sup> ことを対象の様相の変化としてとらえたものだが、本当に「春の日差し」と言えるだけの特徴がそこに十分に備わっているわけではない。よって、4月半ばのまさしく春の日差しについて言うと、季節は既に春そのものであるため不自然になる。季節がまだ完全に春にはなっていない2～3月頃に「{2月 / 3月} 半ばの春めいた日差し」と言えば自然である<sup>(10)</sup>。

(18) 8月だというのに、東京では今日、春 {のような / ?めいた} 日差しを浴びて…

(18) で「春のような日差し」というのは、8月という真夏の時期に、日差しが柔らかく暖かで、まるで春のものと言ってもよいと感じられるものであったことを表している。対象がどのようなものを説明する時、それと似た属性を持つと考えられる、ある別のものをたとえとして出してきた表現である。しかし、同じ状況で「春めいた」とすると不自然になる。

「めく」が表す様相の変化は、明確に特定できるほどにその程度が進めば、完全にそのものと言ってよいものになると考えられる変化である。通常の季節の移り変わりの順序を考えれば、冬から春へと、日差しに十分な「暖かさが増す」ことによって、日差しはまさに「春の日差し」と言ってよいものとなる。しかし、(18) では、盛夏の強烈な日差しが和らいでおり、その熱量がいわば“減じて”いる状況である。この場合には、事態の様相の変化が本来のそれとは逆であり、その様相の変化の程度が進行することによって、対象が完全に「春の日差し」と言ってよいものになるだろうとの予測は成り立ちにくい。

一方、以下の (19) は、このような程度の進行が読み取れる例である。

(19) 平川先生は、「カナダへ行ったらこれくらいじゃ済まないよ。しかし、今の嫌煙運動は、少しファシズムめいていないかね」とおっしゃったものだ。その当時は「少し」だったが、今では純然たるファシズムである。(小谷野敦『すばらしき愚民社会』新潮文庫, 2007 p.266  
下線は引用者)

\_\_\_\_\_から、当時の嫌煙運動の様相はまだ完全に「ファシズム」と言えるものではなかったが、それが進んで、今は完全にそう言ってよいものとなっているということがわかる。

ただし、必ずしもそのような変化が実際に最後まで遂げられるというわけではない。

(20) 議論が少しずつディベートめいてきた。{そして、最後には見事に勝負が決まった／しかし、経験不足から、結局本物のディベートには至らなかった}。

(20) では、議論がディベートと言えるものに近付いてきた様相が「ディベートめく」で表されている。明確に特定できるほどにその程度が進めば、完全に「ディベート」と言ってよいものになるだろうと考えられる変化である。しかし、後続の文脈に示すように、必ずしも実際にその変化が遂げられるとは限らない。「めく」は現時点での様相の変化を表すが、その後、実際にその程度が進行するか否かについては指定するものではない。

#### 4.2 様相の変化の非分析的なとらえ方—「ぼい」「だつ」「づく」との比較

また、「めく」は、対象の様相の変化を「非分析的」にとらえて表す。対象の様相の変化がどのようにしてもたらされるのか、そこに現れ出る特徴を明確に分析してとらえようとするものではない。対象がある様相を帯びることを個別の特徴に分解せず、その全体性においてとらえることを、ここでは「非分析的」なとらえ方と呼ぶことにする。

(21) 2月も終わりに近づき、{どことなく／? 明るさと暖かさが2倍に増した点で、} 日差しが春めいて感じられる。

「どことなく」のように、具体的に日差しの中に現れたどのような特徴から「春めいて」感じられるかは、詳細に特定できなくてもよい。むしろ「明るさと暖かさが2倍に増す」と明確に分析的に示し出そうとすると、「めく」とはそぐわない<sup>(11)</sup>。

(22) あなたはお説教 {っぼい／めいた} ことばかり言いますね。

「お説教っぼい」の場合には、話者は相手の話に、「お説教」の典型例の持つ性質・属性が基準よりも多く含まれていることをとらえている(ケキゼ(2003b:30-31))。即ち、相手の話には、例えば「論す」「理を説く」などの性質・属性が多く含まれていることを、暗黙のうちに分析的にとらえていると言えるだろう。しかし、「お説教めいたこと」は、相手の話に「お説教」のどのような特徴が現れ出ているのか、どこにその様相の変化を生み出す元があるのかを分析して、はっきりとその出所を特定しようとするものではない。

(23) a 論したり、理を説いたりするから、君の話はお説教っぼいだよ。

b ? 論したり、理を説いたりするから、君の話はお説教めいているんだよ。

「お説教っぼい」の場合は、相手の話のどんな点を「お説教」の典型例の持つ性質・属性と考えるのかを「論したり、理を説いたりする」と分析的に述べることも可能である。しかし、(23) bのように、「めく」の場合は、それを明確に分析的に述べるのは不自然である。

よって、「めく」は、対象の様相を分析的にとらえることが難しい場合には、その記述にまさにふさわしい表現となる。

(24) ある学生が提出したのは、SF めいた不思議な物語だ。「何かを書くことは誰かに受信してもらおうこと。一人よがりではよくないな。」柔らかい口調のアドバイスに、学生は「自分は面白かったんだけど……」と口ごもった。(「文学のポジション」2005年6月8日 読売新聞夕刊)

現役作家が大学の日本文学科でゼミを担当し、「時計」「料理」など比較的日常的なテーマを指定して、学生に原稿用紙3枚の短編小説を書いて提出するよう課題を与えている。「一人よがりではよくない」とアドバイスしているように、ある学生から提出された課題は、何のジャンルに属するとも明確に言い難い「不思議」な物語であった。

SF小説なら、「科学的題材を扱っている」「近未来社会を舞台にしている」などの性質・属性が特定できる。日常的題材を日常的世界において書くことが予想される中で、そのようなSFの性質・属性が基準よりも多いと分析的に判断されれば「SFっぽい」と述べることができるだろう。しかし、ここでは他の人に「受信して」もらえるかどうかもういような、理解しにくい物語となっていたものである。対象のどこがSFなのかとあえて明確に分析的に特定することはできず、その曖昧な様相が「SFめいた」ものと表されている。

(25) 脅迫めいた架空請求と見られる通知を受け、困惑したり不安に感じたりするなどの被害が相次いでいます。(http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ska/syouhi/akushitu/pres150924.htm)

(25) は、架空請求の通知について解説し、注意を呼びかける記事である。それによると、そのような通知は全体的に丁寧な口調で、法律の専門用語などを使いながら事実を淡々と告げるかのように書かれており、明確に「脅し文句」と特定できるようなことが記載されているわけではない。しかし、内容としては期日までに連絡がなければ自宅へ出向き、勤務先を調べ、裁判所を通じて差押えを行うという穏やかならぬものとなっている。受け取る側は困惑や不安を感じるが、対象のどこが「脅迫」なのかを明確に分析的に特定するのは難しく、その様相が「脅迫めいた」ものであると、非分析的な「めく」によって表されている。

また、「めく」が後接する名詞は、何らかの「事物」(抽象的な事物を含む)を表す名詞であり、その事物の持つ「特徴」そのものが取り出して示されるわけではない。

(26) 開演2時間前になり、楽屋裏の空気がいよいよ本番めいてきた。

楽屋裏の空気全体がかもし出す雰囲気、様相の変化を、全体的にとらえて「本番めく」とするものである。人々がせわしなく行きかい、緊張感が漂うなどの特徴が現れ出ているだろうが、具体的にどのような特徴がそこに現れ出なのか、特徴そのものを持ち出して「?緊張めく」や「?活気めく」「?殺気めく」などとは言わない。

(27) 開演2時間前になり、楽屋裏の空気が 殺気だって/活気づいて きた。

「殺気だつ」ならば、本番前の楽屋の空気を特徴付ける「殺気」という一つの要素が、そこに非常に際立っていることを表す。その特徴が顕著に、目立つ形で表面に表れているわけである。「だつ」はこのように、際立っている要素そのものを取り上げ、それを表す名詞に後接する<sup>(12)</sup>。また、「づく」の場合は、楽屋裏の空気について、そのもの自身の内からの様相の変化をとらえて言うというよりは、むしろ何らかの要素がそこに加わる<sup>(13)</sup>ことを分析的にとらえて表す。(27)では、「活気」という一要素がそこに加わることが表されている。

#### 4.3 中心的な特徴の現れ—「ぼい」との比較

「XがNめく」によって、対象Xの様相の変化がとらえられる時、そこには名詞Nで表される事物の「中心的」な特徴が現れ出ていると考えられる。

(28) a 少しずつ議論が始まって、会場がようやくシンポジウムめいてきましたね。

b ? 少しずつ照明がついて、会場がようやくシンポジウムめいてきましたね。

例えば、なかなか盛り上がりなかった会場で、徐々に質問の手が上がり議論も始まって、会場全体がようやく活性化してきたような場面・状況では、(28) aのように「シンポジウムめく」と言うことが可能である。しかし、まだ人が入っておらず、照明や機器が整備されつつある段階で、(28) bのように言うのは不自然である。会場といういわば「入れ物」が整ってきただけの段階では、シンポジウムが「シンポジウム」と言えるだけの中心的な特徴が現れているとは言えない。周辺的な特徴のみで、肝心の特徴が現れ出ていなければ、「めく」を用いるのは不自然である。ただし、「シンポジウムっぽくなる」ならいずれも可能である。典型的なシンポジウムの持つ性質・属性がその会場にどのくらい含まれているかは、準備段階でも議論が始まってからでも、それぞれに判断して述べることができる。

(29) 中はきれいなカードだが、封筒には差出人の名前がなく、外から見ただけでは脅迫状{? めいた / っぼい } 手紙だな。

(29)のように「差出人の名前がない」、あるいはまた「肉筆ではなくタイプされた手紙である」などの周辺的な特徴が仮に認められたとしても、肝心の内容そのものから「言うことを聞かなければ強硬手段に出る」というような内容が読み取れなければ、「脅迫状めいて」と言うのは不自然である。一方、「脅迫状っぼい手紙」であれば、手紙の内容という「中心的」な部分に限らず、封筒や筆跡など、手紙の外的側面に着目して言うことも可能である。典型的な「脅迫状」が持つ性質・属性がその手紙にどのくらい含まれているかは、その外見や内容、いずれについても、それぞれに判断することができる。

## 4.4 事態に対する話者の認識および感情・評価的意味の側面

「めく」を用いる場合、話者は対象の様相の変化が、その場面・状況において「当然の成り行き」として予測されていたものではないことを認識している。

(30) 「何だ、これ」差出人を見て、彼は少し息を呑んだ。[中略] 例のひったくり犯の父親からだった。封筒の中には便箋と、東京ディズニーランドのチケットが入っていた。便箋には、自分たちの息子の不始末を詫げる言葉が改めて並んでおり、[中略] 「自己満足だな。こんなふうに贖罪めいたことでもしていれば、多少自分たちの苦しみが和らぐんだろう」(東野圭吾『手紙』文春文庫, 2006 pp.399-400)

(31) 彼らは年齢を重ねるとともに、社会への責任を重視する立場に変わっていった。[中略] ところが近年、三十代後半から四十代になって、なおこうした変貌をみせない文化人が出てきている。[中略] もっとも考えてみれば、『ぶちナショナリズム症候群』を書いたことによって、香山はそうした「若者代表」めいた立場から抜けだそうとしたのかも知れず、[中略] その志だけは多としたい。(小谷野敦『すばらしき愚民社会』新潮文庫, 2007 pp.178-179)

(32) 根拠はないが、永年ともに暮らしていれば、夫の重病を妻が気付かずにいるはずは絶対はない、という自信めいたものを持っており、ひょっとしてこれは医師の誤診ではないか、と [略]。(宮尾登美子『きのね (下)』新潮文庫, 1999 p.397)

(33) 海外出張での不明朗な旅費の扱いや都の事業を巡る公私混同疑惑など、選挙戦では身辺の傷も取り沙汰された。1 期目には物議を醸す発言や評価の分かれる政策はあっても、醜聞めいたものとは無縁であった人が、不思議でならない(『編集手帳』2007年4月9日読売新聞)

(30) では、話者は、加害者の家族から罪滅ぼしのつもりで手紙が送られて来ることなどを考えてもいない。(31) では、これまでと違って、年齢を重ねても、なお若者の立場を代弁する立場から抜け出せない文化人が出てきたことが批判的に述べられている。(32) では話者は、根拠もなく自分を信じ、医者の方を疑うことなどは適切ではないとわかっているのだが、どうしても夫の重病を信じたくないという文脈である。(33) は、これまで公私混同を指摘されるようなことのない公職者に対し、その気の緩みや驕りを諷める文章である。いずれも「贖罪」「若者代表」「自信」「醜聞」等の中心的な特徴が現れ出ること、その場面・状況において当然の成り行きとしては予測されていないものとなっている<sup>(14)</sup>。

また、このような認識は、以下のように、話者が人の目あるいは思惑を気にして、対象を曖昧化し、謙遜のポーズをとってみせるという用法にもつながっていく。

(34) ちょっと、自慢めくののですがお許し下さい。以下に、ある雑誌の96年1月22日号に



私を書いたコラムの原稿を再掲載します。(http://ryumurakami.jmm.co.jp/dynamic/economy/article29\_3.html)

(35) いささか自慢めいていますがね、60の手習いで最近私もブログを始めたんですよ。

(34) では、話者は社会の動きについて意見を求められ、以前、時代の変化を先取りするコラムを書いていたことを、「自慢めくが」と前置きして再び取り上げている。(35) は例えば、若い世代と同じようにブログを始めたと言うと自慢に聞こえるだろうと、60歳過ぎの話者が気を回して言うものである。いずれも、それが「自慢」と言えるものではないこと、そして「自慢」の様相が現れることは当然の成り行きとして予測されてはいないこと、即ち自慢と受けとめられるようなことは、この場合話者の本意ではないということが、「めく」を用いることによって示されると言えるだろう。

(36) regtool は [中略] 意外と便利に使えるのですが、世間では殆ど利用されていないように見受けられるので、解説めいたものを書いてみました。(http://www.sixnine.net/cygwin/cygwin-doc/regtool.html)

(36) では、話者は、ある分野について比較的知識のある人たちに、意外と見過ごされている事項をわかりやすく説明しようとしている。しかし、「わからない人に教えてあげる」という驕った態度に受け取られないよう「解説めく」としている。多少専門的なことや難しいことを述べようとする際に、さほど大したことではないのですがと曖昧化し、謙遜してみせるものである。

ただし、このような話者の認識は、必ずしも事態に対する「マイナス評価」につながるものではない。「めく」自体はプラス・マイナスの価値観については中立的と考えられる<sup>(15)</sup>。

(37) a 淡い色金紗の羽織がきちんと身に合い、手首のしまったきびきびした才人めいた風采が聡明そうに秀でた額にかかる黒髪と共にその辺の空気を高貴に緊密にして居た。がさつな、だらしない風をした沢山の文人のなかに、そういう麻川氏を見て葉子はこころにすがすがしく思い乍ら、[略] (岡本かの子『鶴は病みき』青空文庫  
http://www.aozora.gr.jp/cards/000076/files/1283\_5365.html)

b ? きびきびした才人じみた風采が…

(37) a のように、「めく」は「才人」のようなプラス評価を表す名詞にも後接でき、述べられている事態も「空気を高貴に緊密にしていた」と特にマイナス評価を表すわけではない。一方「じみる」は、(37) b や「? {賢人/励まし} じみたことを言う」のようにネガティブな要素・側面を抽出するのが難しい、明らかなプラス評価の名詞には接続しにくく、様相の変化を好ましくないものとして表現する。したがって、例えば「お説教めいたことを言う」ならば、「お説教」の中心的な特徴として、人の道を説くなどの内容が想定されることになるが、「お説教

「じみたことを言う」では、くどくど同じことを繰り返すなど、「お説教」の好ましくないネガティブな側面<sup>(16)</sup>に着目した表現となる。

## 5. まとめ

本稿では、現代日本語における接辞「めく」の意味・用法を分析した。「XがNめく」は、「対象Xに名詞Nで表される事物の中心的な特徴が現れ出ることを、Xそのものの様相の変化として非分析的にとらえて表す。それは、明確に特定できるほどにその程度が進めば、完全にNと言ってよいものになると考えられる変化である。ただし、話者はこのような様相の変化が、その場面・状況において当然の成り行きとして予測されていたものではないことを認識している」と考えた。ただし、「めく」は、その後実際に、その様相の変化の程度が進行するか否かについては指定しない。

「めく」は「らしい」や「のようだ」とは異なり、「本当にそのものらしく」なることや「一見そのものらしく」見えることを表すものではない。また、「めく」は対象に中心的な特徴が現れ出ることを、その様相の変化として非分析的にとらえるが、「ぼい」は対象に含まれる性質・属性を暗黙のうちに分析的にとらえると思われる。また、「だつ」はある特徴が非常に際立っていること、「づく」は何らかの要素が加わることを、いずれも分析的にとらえて表す。

また、「じみる」は対象のネガティブな側面に着目するマイナス評価の表現だが、「めく」はプラス・マイナスの価値自体については中立的である。ただし、話者は対象の様相の変化が、その場面・状況において当然の成り行きとして予測されていたものではないことを認識している。このため、話者が人の目あるいは思惑を気にして対象の様相を曖昧化し、謙遜のポーズを示したりする場合に、「めく」が用いられることがあると考えられる。

## 注

- (1) 一語化していると考えられる「うめく、わめく、きらめく、ひしめく、ひらめく、よるめく、(あわて)ふためく、(わらい)さざめく」などは、分析の対象から除く。
- (2) 阪倉(1995:148-149)で「新派の役者めく」という表現が可能であると指摘されているように、「田舎の風景めく」「子供の落書きめく」「安っぽい小説の中の登場人物めく」「初夏のすがすがしい薫りめく」のように「名詞句+めく」の形も可能である。
- (3) 中村(1987:426)では、「めく」は名詞の他に形容詞の語幹、形容動詞の語幹、副詞「わざと」に後接すると述べられている。形容詞の語幹で考えられるのは「ふるめく」、形容動詞の語幹では「親切めく」「忠実めく」などがその例となる。
- (4) 例えば「いまめく」「かどめく」「しなめく」「そらめく」のような表現である。
- (5) 山口(1993:34)は「規範めく」「結論めく」などの例を挙げ、現在「名詞+めく」は「漢語名詞を語基とする例がかつてに比べると増大しているよう」だと指摘している。
- (6) ウェブ上で採取した事例のURLは、いずれも2007年1月～5月にかけてのものである。

- (7) 森山(1986:23)が「めく」「ぶる」「ぼい」が後接するのは「一定の特性を含意するもの」であり、「固有限定的であってはいけない」と指摘しているように、「めく」が後接する名詞については、「? [私/弟の太郎/昨日買ったあの本] めく」のようなものはいずれも不自然である。
- (8) ケキゼ(2003a:295)は、表現の「やわらげ」という観点から「めいた」という形式に触れ、これを「本質のはっきりつかめない様子」について本来用いられるとしている。
- (9) 阪倉(1995:153)は、「『春めく』とは、春といふ語のあらず属性の発現することを意味する」としている。(漢字表記は引用者が常用漢字に改めた。)
- (10) グループ・ジャマシイ編著(1998:569-570)では、「少しずつ春めてきた」は「少しずつ春のようになってきた」ということで、「冬の終わりごろに使う」としている。
- (11) ただし、(21)の例文については、いずれも不自然ではないと判断する日本語母語話者もいる。
- (12) 入江(1987:428)では「人目につくほどはっきり現れる」としている。
- (13) 森田(1989:732)は、名詞に続く「つく」を「その事柄・事態が添い加わる」とする。
- (14) 「春めく」も、まだ春ではない時期にこそ様相の変化をとらえて言うものである。今そこに春の特徴が現れ出ることが、そこで当然のことと認識されているわけではない。
- (15) 事態が当然の成り行きとして予測されるか否かと、それが話者にとって望ましいか否かとは別の問題である。
- (16) 黄(2004:64-68)は、このような「じみる」を、主体の行動・動作の「ある側面」に注目するマイナス評価のものと分析している。

#### 引用文献

- 入江佐登子(1987)「だつ(接尾辞)」日本語教育学会編『日本語教育事典(縮刷版)』大修館書店 p.428
- 大野 晋・浜西正人(1993)『類語国語辞典 第七版』角川書店
- グループ・ジャマシイ編著(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
- ケキゼ タチアナ(2003a)「現代日本語における表現の『やわらげ』～『そうだ』、『げ』、『ぼい』などの場合～」『言葉と文化』第4号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 日本語文化専攻 pp.293-306
- (2003b)「『ぼい』の意味分析」『日本語教育』118号 pp.27-36
- 黄 其正(2004)『現代日本語の接尾辞研究』溪水社
- 阪倉篤義(1995)『語構成の研究』(第6版)角川書店(初版1966年)
- 白川博之監修 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 中村米男(1987)「めく(接尾辞)」日本語教育学会編『日本語教育事典(縮刷版)』大修館書店 p.426
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- (1996)『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房
- 森山卓郎(1986)「接辞と構文」『日本語学』第5巻第3号 明治書院 pp.19-27
- 山口 豊(1993)「接尾辞『めく』の消長」『言語表現研究』9 兵庫教育大学 pp.28-35

## The Meaning and Usages of the Current Japanese Suffix *-meku*

SUZUKI Tomomi

The purpose of this paper is to analyze the meaning and usages of the current Japanese suffix *-meku*.

It has been said that the nouns preceding *-meku* are conventionally limited, and that the suffix is not very productive in current Japanese. However, at present we can find many new cases in which *-meku* follows Chinese nouns composed of four or more Chinese characters, as well as nouns written in katakana.

Moreover, little attention has been given to the speaker's motive for and subjective attitude towards situations in which *-meku* is used. In this paper, I describe the meaning of "X ga N-*meku*" in the following way:

- (1) "X ga N-*meku*" is used to describe non-analytically the appearance of the core features of N which appear in X as a result of some change in the situation of X itself. The speaker recognizes that N's appearance is not an expected or natural result in the present situation.

This paper also discusses new usages of *-meku* by speakers to show modesty in expressing self-pride or intelligence. Such usage is consistent with *-meku*'s characteristic implication of vagueness.